

2歳児の自己意識的情動に関わる行動の個人差について

久崎, 孝浩
九州大学大学院人間環境学府

大神, 英裕
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/847>

出版情報：九州大学心理学研究. 2, pp.59-67, 2001-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

2歳児の自己意識的情動に関わる行動の個人差について

久崎 孝浩 九州大学大学院人間環境学府
大神 英裕 九州大学大学院人間環境学研究院

Individual differences in two-year-olds' behaviors relevant to self-conscious emotions

Takahiro Hisazaki (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Hidehiro Ohgami (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The present study analyzed individual differences in two-year-olds' behaviors relevant to shame and guilt, in relation to parental disciplines and their temperaments. 36 children were observed when they happened to break an experimenter's doll. I rated frequency of children's behaviors and latency of those, supposed that averting gaze and bodily avoidance are relevant to shame and that repairing and telling experimenter are relevant to guilt. Their parents were inquired what temperamental features their children have and how often they use each of 4 types of disciplines. At first, children's tendency to feel ashamed is likely to be independent of tendency to feel guilty, especially because both latencies and frequencies of behaviors relevant to shame are not positively correlated with those of behaviors relevant to guilt. Behaviors relevant to shame and guilt were little associated with ages and genders, but some associated with disciplines and temperaments. The results suggested that behaviors relevant to shame and guilt depend on what type of disciplines parents much use and also on which outside or within the family they do.

Keywords: shame, guilt, parental discipline, temperament, 2-year-olds.

問題と目的

人は生まれたときから多様な認知を発達させるとともに、様々な情動を経験していく。Lewis, Sullivan, Stanger, & Weiss (1991) は、自己や他者またその関係性に意識を向けることができるようになる生後1年目後半になると経験される情動の様相が異なり、それ以前に経験される喜び、興味、驚き、悲しみ、嫌悪、怒り、恐れといった情動を基本情動とし、一方その後に出現してくる照れ、共感、羨望といった情動は自己意識的情動として区別している。また、M. Lewis (1991) は2歳以降と考えられる自己評価(あるルールや基準に対して自身はいいのか悪いのか)が出現すると、それ以前の自己意識的情動とは異なる恥、罪悪感、誇りといった自己意識的情動が出現すると考えている。

近年、特に自己意識的情動が注目されており、その中でも2歳台に出現する恥や罪悪感に関する証拠が幾つかの研究で報告されている(例: Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, Wagner, & Champman, 1992; Lewis, Alessandri, & Sullivan, 1992; Stipek, Recchia, & McClintic, 1992)。Zahn-Waxler et al. (1992) は、2歳児の向社会的行動と修復行動の発達研究において、子ども自身が他者に苦痛を与えた後に他者に対する身体的慰撫や援助行動などが

観察されることを報告している。また、Lewis et al. (1992) は、2歳児が難しい課題に失敗したときに実驗者から視線をそらしたり回避的行動を示したり身体を萎縮させたりする様子が観察されることを報告している。援助行動、修復行動、視線をそらす、回避的行動は恥や罪悪感を反映しているものと思われる。

恥と罪悪感の差異については、他の多く研究者も議論している(例: Benedict, 1946; H.B. Lewis 1971; M. Lewis, 1991, 1993; Lindsay-Hartz, 1984; Gehm, & Scherer, 1988; Ferguson, Stegge, & Damhuis, 1990; Tangney, Miller, Flicker, & Barlow, 1996; Keltner, & Buswell, 1996)。従来の研究で、経験される恥と罪悪感の違いが傍観者の存在によるのか、また、恥と罪悪感を引き起こす状況や失敗もしくは罪のタイプに違いがあるのか検討されてきたが、そのような違いは明確に示されなかった(例: Tangney, 1992; Keltner, & Buswell, 1996)。このことは恥や罪悪感は同様の状況で生起するものと考えられる。また、恥と罪悪感は表情や生理的身体的変化などから区別することは困難と言われている(Barrett, 1995)。Lewis (1993) は、認知的評価の観点から、失敗が自己全般に帰属される場合には恥が、失敗が自己の特異的な側面・行為に帰属される場合には罪悪感が経験されるとしている。しかし、このような観点から恥と罪悪感の区別

を試みることに特に自分自身の情動経験について言及困難な2歳台の子どもに対して必ずしも有効とは思われない。

一方、個人的特性という観点からも恥と罪悪感の差異が多く研究されている (Barrett, Zahn-Waxler, & Cole, 1993; Tangney, 1990; Tangney, Wagner & Gramzow, 1992)。特に, Barrett et al. (1993) は, 2歳台の子どもを対象に, 子ども自身が他者を困惑させる状況での様子を観察し, 回避的な行動パターンと向社会的・修復的な行動パターンを特定している。これは, 2歳台から個人的特性として恥と罪悪感が存在することを示唆している。

それでは, このような個人差はどのような発達の要因に規定されるのであろうか。個人差を説明する要因として, これまでに, 社会化要因 (例: Barrett, 1995; Ferguson, & Stegge, 1995; Hoffman, 1982; M. Lewis, 1992; Miyake & Yamazaki, 1995; Potter-Efron, 1989; Zahn-Waxler, & Robinson, 1995) や気質的要因 (例: Dienstbier, 1984; Kochanska, 1991, 1993) が検討されてきた。

Lewis (1994) によると, 恥や罪悪感といった自己評価を伴う情動の生起には社会的ルールや基準の内在化が関わると考えられている。社会的基準の内在化は社会的経験の中で促進するが, 特に, 養育者によるしつけの実践は2歳台の子どものそうした社会的経験として重要な位置を占めていると考えられる。しつけの実践は恥や罪悪感の社会化要因として多く検討・議論されてきた (例: Hoffman, 1982; Hoffman, 1983; Rollins & Thomas, 1979; Dienstbier, Hillman, Lehnhoff, Hillman, & Varkenaar, 1975; Zahn-Waxler, Radke-Yarrow, & King, 1979; Zahn-Waxler, & Kochanska, 1990)。Hoffman (1982) は, 何らかの基準を犯したときに説明方略 (induction) を用いることは, 他者に与えた損害的な結果への注目を促し, 罪悪感の経験しやすさに繋がると述べている。Magai, Distel, & Liker (1995) は, 説明方略において, 状況や社会的基準について説明する理由づけ方略と, 害悪を受けた他者に焦点づけて説明する罪悪感を利用した説明方略とを区別し, 情動特性としつけ方略との関連を検討している。結果, 罪悪感を用いた説明方略はネガティブな情動と関連していたが, 理由づけはネガティブな情動と関連しないことが明らかになっている。

一方, 軽い体罰や愛情撤去の脅しといったしつけ方略は, 子どもを情動的に喚起させ, 他者に与えた結果への注目を妨げるだけでなく, 罰を受けたり見捨てられたりするのではないかとといった子ども自身への関心を促し, 恐れや不安を基にした罪悪感の経験しやすさに繋がると考えられている (Zahn-Waxler, & Kochanska, 1989; Zahn-Waxler, Kochanska, Krupnick, & Mcknew, 1990)。恐れや不安を基にした罪悪感とは, 今日で言うところの恥である (Barrett et al., 1993)。

こうした知見を考慮すると次のような仮説が想定される。理由づけは恥や罪悪感とあまり関連しないだろう。また, 罪悪感を用いた説明方略は罪悪感とある程度関連があるのではないだろうか。軽い体罰や愛情撤去の脅しは恥と関連し, 罪悪感とはあまり関連しないであろう。例えば, 罪悪感を用いた説明方略を多く受けている子どもは罪悪感に関連する修復行動や告白行動を多くまたは素早く示すかもしれない。また, 軽い体罰や愛情撤去の脅しの多い子どもは, 特に, 恥に関連する視線をそらす行為や身体的回避を多くまたは素早く示すであろう。

このように恥や罪悪感の個人差要因として養育環境を中心に考える研究者がいる一方で, 複数の研究者は生物学的基盤の存在を明らかにしようとしている。Zahn-Waxler & Robinson (1995) は双生児研究で, 恥は環境要因よりも遺伝的要因に大きく規定されるが, 罪悪感には遺伝的要因よりも環境要因に大きく規定されているという示唆を得ている。このように, 恥や罪悪感の発達を考えるときに生物学的要因を無視することはできない。生物学的要因と考えられる気質と恥や罪悪感との関連の検討は極少数である。例えば, 新奇状況での恐れやすさという気質と獲得された良心の度合いとの関連について検討している研究が見られる (Asendorf & Nunner-wilder, 1992; Kochanska, 1991)。また, Young, Fox, & Zahn-Waxler (1999) は, 生後4ヶ月時に見知らぬ人物に対して無反応であり感情を表出しない子どもは2年後見知らぬ人物に対して向社会的行動や共感をあまり示さないことや, 見知らぬ人物に対して抑制的な2歳児は共感的ではないことを明らかにしている。このように, 恐れやすさといった気質的特徴は他者の要求への注意・関心を妨げ, 良心の低さを予測すると考えられている (Zahn-Waxler, & Robinson, 1995)。こうした知見を考えると, 次のような仮説が想定される。特に恐れやすさという気質を備えた子どもは他者への関心・注意が妨げられるゆえに, 身体的回避や視線をそらす行為を多くまた早く示すのではないだろうか。つまり, そのような気質を持つ子どもは罪悪感よりも恥を経験しやすと考えられる。

そこで, 本研究では, 恥と罪悪感に関連する行動と養育者のしつけ方略, 子どもの気質との同期的な関連性について検討する。但し, 恥や罪悪感といった情動には自己評価といった認知能力の発達が連関することを想定すると, 性差や月齢といった要因も大きく影響すると思われる。そこで, こうした要因も導入して, 2歳児の恥や罪悪感に関連する行動の個人差に関わる要因について検討する。

方 法

実験観察

被験者 福岡県内および山口県内の私立ならびに公立保育園に通園している2歳児36名（平均2歳7ヶ月、レンジ25～37ヶ月、男児15名、女児21名）。

手続き 実験観察は各保育園内の被験児がいるクラスの部屋で行った。実験時には1名の被験者、1名の保育の先生、実験者が室内に入る。実験前や実験の最中に被験者が激しい苦痛や泣きを示した場合にはその時点で実験を中止すること、実験終了後実験者は必ず被験者に対して実験中に起きた出来事は被験者の過失ではないことを説明し、気持ちを立て直すために十分な時間を設けることを前提として、実験を行った。そして、実験者は数日間被験者たちと園内で過ごし、被験者との良好な関係を作るよう心掛けた。またその期間に、被験者が実験で用いる人形を紹介し、それを実験者が大切にしていることを知らしめた。

実験場面 実験場面での被験者の様子は、ビデオテープに録画した。実験場面は5つの状況で構成される。本実験で用いる人形は初めから手足が取れやすいように細工している。(a)被験者は保育の先生と自由に遊ぶ、(b)実験者が人形を持って入り、その人形が様々な動きをするのを被験者の前で実演して、人形を被験者に手渡して退室する、(c)被験者は実験者が再び入室するまで1人で人形と遊ぶ（その間、保育の先生は被験者から離れたところで保育関連の仕事をしてもらい、実験終了まで被験者に関わらないようにしてもらい）、(d)人形の手足がとれて2分後に実験者は部屋に入り、何も言わずに手足のとれた人形を1分間じっと見続ける。

行動の評定 実験者が部屋に入って1分間人形を見続ける間に見られる被験者の行動を評定した。行動の評定のためのコーディングは、Barrett et al. (1993) が用いた行動コーディングを参考に以下のように作成した。

1. 修復行動：手足をつけようとする。または、実験者に手足をつけるよう要求する。
2. 告白行動：とれた手足や人形を実験者に見せる。また、「手足がとれた」と実験者に言う。
3. 視線をそらす：実験者の方向や顔を見た直後に、子どもにとって重要でない人物（他の子ども）や物体（天井、窓の外、置かれている玩具など、子どもが直接何らかの関わりのない対象）を見る。
4. 身体的回避：実験者の方向や顔を見ながら後ずさりする。また、実験者から子どもにとって重要でない人物や物体の方向へ移動する。
5. 微笑み：口角や頬の筋肉が上がる。
6. 身体的自己慰撫：自分の体の一部（足の指や口元など）や髪の毛、自身が着ている衣服を持続的に触

る。

7. 実験者への注視：実験者が部屋に入ったことを気づいた後に、実験者の方向や顔を見る。

実験者から視線をそらす行為や実験者から身体的に回避する行動は、恥に関連するものと考えて評定された。人形を修復しようとする行動や人形や実験者にその手足を見せたり人形が壊れたことを告げたりする行動は、罪悪感に関連するものと考えて評定された。また、Geppart (1986) や DiBiase & Lewis (1993) で用いられている困惑という情動のコーディングに基づき、微笑みや身体的自己慰撫は困惑に関連するものとして評定された。

また、研究に直接関わらない院生にも評定してもらい、2者間評定の一致率はどの評定においても κ 係数0.83以上であった。

質問紙

対象 福岡県内および山口県内の保育園に通園する24～37ヶ月の幼児をもつ養育者（主に母親）108名（実験観察の対象になった幼児の養育者も含む）。まず、保育園園長や2歳児クラス担当の先生たちと質問内容を協議・検討した。質問紙調査は、各保育園の2歳児クラス担当の先生に対して母親に質問紙を配布してもらうことをお願いした。

質問内容 1. 気質的特徴に関する尺度：Goldsmith (1992) が作成した16～36ヶ月児を対象とする質問紙TBAQ (Toddler Behavior Assessment Questionnaire) を用いた。TBAQは、活動水準、快情動の表出しやすさ、社会的な恐れを表出しやすさ、興味・固執性、怒りの表出しやすさの5つの尺度により構成され、7段階評定である。活動水準は、日常の様々な状況における身体運動の活発さを示す。快情動の表出しやすさは、それほど脅威的ではない新奇な状況で子どもが笑顔や笑い声などポジティブな情動を示す程度を表す。社会的な恐れを表出しやすさは、新奇なまたは偶発的な状況で抑制、苦痛、接近よりも引きこもり、恥ずかしさを示す程度を表す。興味・固執性は、1人遊びのときにどの程度集中して課題に取り組めるかを表す。怒りの表出しやすさは、養育者や他の子どもとの葛藤状況で泣いたり、抵抗したり、攻撃したり、膨れっ面になったりする程度を表す。5尺度それぞれの得点を標準化し、分析に用いた。

2. 養育者のしつけに関する尺度：Magai et al. (1995) を参照に作成した。子どもの家庭外での3つの場面（他の子どもの絵本を取り上げる、静かにしなければならぬ場所で騒ぐ、他の子どもに噛みついたり叩いたりする）と家庭内での3つの場面（食べ物や飲み物をこぼしてしまふ、遊んでいて部屋を汚したり大切なものを台無しにしてしまふ、おもちゃを壊してしまふ）を設定し、ここ1ヶ月の間に6つの各場面に養育者が遭遇したときに、養育者がどのようなしつけ方略をどの程度用いるかを7

件法で尋ねた。また、設定した場面に遭遇しなかった場合には×（どれにも当てはまらない）に回答するよう求めた。家庭内と家庭外それぞれにおいて、各しつけ方略（理由づけ、軽い体罰、罪悪感を利用した説明、愛情撤去の脅し）の得点を標準化して、分析に持ち込んだ。

結 果

以下のように大きく3つに分けて分析・検討し、結果を示す。まず、第一に、恥や罪悪感に関わる行動間の関連を検討し、どのような行動パターンの個人差があるのか検討する。第二に、2歳児の恥や罪悪感に関わる行動の個人差に影響する要因として、子どもの月齢、性別といった社会化や気質以外の要因と個人差との関連を見ていく。そして、第三に、養育者のしつけや家庭の情動的風土といった社会化要因と気質が、2歳児の恥や罪悪感に関わる行動の個人差にどのように影響するのかを検討していく。

恥や罪悪感に関わる行動について

恥や罪悪感に関わる行動 罪悪感よりも恥を優位に経験している子どもは、行為傾向（Barrett, 1995）として恥に関わる行動が早急にかつ多く示されると考えられる。また、逆に、恥より罪悪感を優位に経験している子どもは行為傾向として罪悪感に関わる行動が早急にかつ多く示されると考えられる。そこで、行動の潜時と頻度を取り扱った。まず、行動コーディングに基き、各行動の潜時、頻度を測定した。続いて、実際の実験者入室から実験終了までの時間が対象児によって異なり、その時間が潜時や頻度に影響することを考えて、潜時については実験者入室後から行動生起までの時間を実験者入室から実験終了までの時間で割り、さらに60秒を掛けて算出した（Table 1 参照）。また、頻度についても実験者入室以降の行動生起頻度を実験者入室から実験終了までの時間で割り、さらに60秒を掛けて、1分あたりの頻度を算出した（Table 1 参照）。

恥や罪悪感に関わる行動間の関連 まず、行動の潜時や頻度を正規性の検定にかけたところ、修復行動と実験

者への注視それぞれの頻度の正規性は保たれなかったため、それらとの相関については順位相関係数を算出した。続いて、潜時および頻度において各行動間で相関係数を算出した（Table 2 参照）。潜時では、修復行動と告白行動の間に有意な正の相関、告白行動と視線をそらす行為の間に有意な負の相関、身体的回避と身体的自己慰撫の間に有意な正の相関が見られた。また、頻度では、修復行動と身体的回避の間に有意な負の相関、修復行動と身体的自己慰撫の間に有意な負の相関、身体的回避と身体的自己慰撫との間に有意な正の相関が見られた。

社会化や気質以外の要因との関連

月齢との関連 潜時と月齢との関連では、視線をそらす行為の潜時にのみ有意な正の相関が見られた（ $r=.42$, $p<.01$ ）。頻度と月齢との関連では、視線をそらす行為の頻度にも有意な負の相関が見られた（ $r=-.58$, $p<.001$ ）。

性別との関連 潜時と性別との関連では、視線をそらす行為のみが男児よりも女児で有意に早く示された（ $t=3.03$, $p<.01$ ）。頻度と性別との関連では、視線をそらす行為でのみ女児の頻度のほうが男児よりも有意に多かった（ $t=2.96$, $p<.01$ ）。

社会化要因や気質との関連

養育者のしつけ 恥や罪悪感に関連する行動の個人差を規定する社会化要因として養育者のしつけについて検討された。家庭外の場面と家庭内の場面での養育者のしつけに関する4方略それぞれの得点と行動の潜時や頻度との相関係数を算出した（Table 3 参照）。その結果、家庭外では、軽い体罰と告白行動の潜時との間に有意な負の相関、軽い体罰と身体的回避の頻度との間に有意な負の相関が見られた。家庭内では、愛情撤去の脅しと身体的自己慰撫の潜時との間に有意な負の相関、軽い体罰と身体的回避の頻度との間に有意な正の相関が見られた。その他にも、有意ではないながら特定のしつけ方略と行動変数との間に相関傾向が見られた。

子どもの気質的特徴 子どもの気質的特徴として、活

Table 1
各行動の潜時および頻度の平均と標準偏差（1分あたり）

	修復行動	告白行動	視線を そらす	身体的回避	微笑み	身体的 自己慰撫	実験者 への注視
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
潜時 (秒)	24.16 (23.09)	34.11 (26.80)	44.71 (22.76)	57.13 (11.74)	50.02 (20.49)	52.14 (17.01)	13.16 (15.50)
頻度 (回)	2.39 (1.92)	1.34 (2.50)	.69 (1.07)	.13 (.45)	.53 (1.09)	.29 (.65)	3.55 (2.44)

Table 2
潜時および頻度における行動間の相関

		修復行動	告白行動	視線を そらす	身体的回避	微笑み	身体的 自己慰撫	実験者 への注視
潜時	修復行動							
	告白行動	.40*						
	視線をそらす	-.09	-.36*					
	身体的回避	-.21	.04	.04				
	微笑み	-.10	.22	-.17	-.12			
	身体的自己慰撫	-.19	.08	.09	.52**	.16		
	実験者への注視	.01	.24	.05	.13	.16	.12	
頻度	修復行動							
	告白行動	.24						
	視線をそらす	-.15	.08					
	身体的回避	-.36*	.19	.08				
	微笑み	-.12	-.01	-.09	.05			
	身体的自己慰撫	-.35*	.15	.32†	.38*	.33†		
	実験者への注視	.31†	.48**	.23	.18	.36*	.21	

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .1$

注. 太字は、修復行動や実験者への注視の頻度は正規性を保っていないために算出された順位相関係数を表す。

Table 3
恥や罪悪感に関わる行動変数と養育者のしつけ方略との相関

		家庭外				家庭内			
		理由づけ	軽い体罰	罪悪感を利用した説明	愛情撤去の脅し	理由づけ	軽い体罰	罪悪感を利用した説明	愛情撤去の脅し
潜時	修復行動	-.23	-.06	-.03	.05	.21	-.01	.30†	.07
	告白行動	-.17	-.39*	-.04	-.26	.17	-.18	.05	-.01
	視線をそらす	-.03	-.12	.15	.07	-.14	.01	.02	-.17
	身体的回避	-.04	.29	.08	.18	-.18	-.28	.19	.00
	微笑み	.19	-.18	.11	-.29	-.29	-.28	-.21	-.24
	身体的自己慰撫	.01	-.17	.24	-.23	-.03	-.23	.08	-.38*
	実験者への注視	.10	.11	-.33†	-.14	-.28	-.19	-.34†	-.17
頻度	修復行動	.32†	-.01	.13	-.13	-.24	-.12	-.24	-.26
	告白行動	-.01	.29	-.14	-.04	-.01	.25	.01	-.03
	視線をそらす	.00	.21	-.24	-.06	.21	.08	-.07	.05
	身体的回避	-.33†	-.38*	-.29	-.24	.21	.43*	.00	-.13
	微笑み	-.27	.12	-.19	.22	.30	.28	.18	.22
	身体的自己慰撫	-.02	.28	-.22	.24	-.02	.23	-.10	.31†
	実験者への注視	-.16	.02	-.09	.04	.11	.23	-.02	-.02

* $p < .05$, † $p < .1$

注. 太字は、修復行動や実験者への注視の頻度は正規性を保っていないために算出された順位相関係数を表す。

Table 4
各行動の潜時および頻度と子どもの気質の特徴5因子との相関

	活動水準	快情動の表出	恐れやすさ	興味・固執性	怒りやすさ
潜時					
修復行動	-.02	.25	-.24	.09	-.33 [†]
告白行動	.05	-.03	.05	-.31 [†]	.06
視線をそらす	.07	-.29	-.10	.00	-.14
身体的回避	.20	-.22	.17	.18	.28
微笑み	.10	-.18	-.10	-.17	.06
身体的自己慰撫	-.14	-.04	-.17	.35*	.06
実験者への注視	-.20	.08	-.02	.19	-.07
頻度					
修復行動	-.05	-.20	.17	.03	.15
告白行動	.12	.04	-.15	-.15	.19
視線をそらす	.18	.25	.18	-.18	.28
身体的回避	-.24	.21	-.06	-.24	-.23
微笑み	-.07	.14	.18	.06	-.05
身体的自己慰撫	.16	.06	.19	-.30 [†]	.02
実験者への注視	.08	.23	-.02	-.16	-.11

[†] $p < .1$, * $p < .05$

注. **太字**は、修復行動や実験者への注視の頻度は正規性を保っていないために算出された順位相関係数を表す。

動水準、快情動の表出、社会的な恐れやすさ、興味・固執性、怒りやすさそれぞれの得点と各行動の潜時および頻度との相関が検討された (Table 4 参照)。その結果、興味・固執性と身体的自己慰撫の潜時との間に有意な正の相関が見られた。また、興味・固執性と告白行動の潜時との間有意でないが負の相関、怒りやすさと修復行動の潜時との間に有意でないが負の相関が見られた。

考 察

本研究では、まず、恥や罪悪感に関わる行動間にとどのようなパターンがあるのかについて検討した。潜時では、修復行動と告白行動との間に正の相関、告白行動と視線をそらす行為との間に負の相関、身体的回避と身体的自己慰撫との間に正の相関が有意だった。このことは、告白行動を素早く示す子どもは修復行動も素早く示す一方、視線をそらす行為を示しにくいこと、身体的回避を素早く示す子どもは身体的自己慰撫も素早く示す傾向があることを表している。また、罪悪感に関連する修復行動や告白行動と、恥に関連する身体的回避・自己慰撫との間に相関は見られなかった。こうした潜時での行動間の相関パターンから、罪悪感を体験しやすい傾向と恥を経験しやすい傾向はおおよそ独立している可能性が考えられる。頻度では、修復行動と身体的回避との間に負の相関、修復行動と身体的自己慰撫との間に負の相関、身体的

回避と身体的自己慰撫の間に正の相関などが有意であった。このことから修復行動を多く示す子どもは身体的回避や身体的自己慰撫を示すことがほとんどなく、身体的回避を多く示す子どもは身体的自己慰撫も示しやすいことが明らかになった。罪悪感に関連する修復行動や告白行動の多さが身体的回避や視線をそらす行為といった恥に関連する行為と正に関連しているという結果は一つも見当たらなかった。こうしたことから、罪悪感を体験しやすさと恥を経験しやすさはおおよそ独立している可能性が示唆される。

次に、2歳児の恥や罪悪感に関わる行動の個人差を生み出す要因について、本研究では月齢や性別と個人差の関連を検討した。その結果、性別との関連では、女兒のほうが男児よりも視線をそらす行為が有意に多いという結果が得られた。1歳台から他者の苦痛に対して女兒は男児よりも苦痛を経験しやすいことが言われているように (Zahn-Waxler, Cole, & Barrett, 1991)、女兒は男児よりも実験者の苦痛により強く影響されるゆえに、女兒のほうが男児よりも実験者に対して視線をそらす行為を素早くまた多く示したのかもしれない。Barrett et al. (1993) は、男児のほうが女兒よりも罪悪感に関連する告白行動を多く示すことを報告しているが、本研究ではそのような結果は示されなかった。結局、本研究では視線をそらす行為については性差が認められたものの、他

の恥や罪悪感に関連する行動での性差は認められなかったゆえに、恥もしくは罪悪感の経験しやすさにおける性差は殆どないように見受けられる。

また、月齢の低い子どもほど視線をそらす頻度が多くまた素早いという結果も得られた。しかし、他の行動では月齢との関連は認められなかった。Zahn-Waxler et al.(1992)によれば、自身の欲求への関心と他者の福利との間で葛藤するような月齢の低い段階では、他者の苦痛の伝染による自身の苦痛を建設的なまた他者志向的な行為パターンに置き換えることが困難であるとしている。それを考えると、月齢の低い子どものほうが素早くまた多く視線をそらしたのは、自身の苦痛に晒されやすく建設的な行為を獲得していないためかもしれない。

続いて、恥や罪悪感に関連する行動の個人差は気質や社会化の影響をどのように受けているのであろうか。そこで、恥や罪悪感に関わる行動と社会化要因や気質的要因とがどのように関連しているのかを相関係数より検討した。しつけとの関連についての結果は、本研究の仮説の一部を支持した。Table 4の結果から特に有意な関連がみられたものについて述べると、告白行動を素早く示す子どもは家庭外で軽い体罰を多く受けていること、身体的自己慰撫を素早く示す子どもは家庭内で愛情撤去の脅しを多く受けていること、身体的回避を多く示す子どもほど家庭外で軽い体罰を受ける程度は少なく、家庭内で軽い体罰を多く受けていることが示唆された。身体的回避や自己慰撫が恥や困惑に関連すると考えると、愛情撤去の脅しや軽い体罰は、恥・困惑といった情動を促すのかもしれない。しかも、家庭外と家庭内では軽い体罰の効果が異なる可能性が考えられる。つまり、家庭外に比べて、家庭内では子どもが養育者に迷惑をかける出来事が多く、しつけは二者間で行われ、子どもにより強い影響を与える可能性が考えられる。また、告白行動を素早く示す子どもが家庭外で軽い体罰を多く受けているという結果からも、家庭内外といった状況の効果について考えていく必要があるだろう。

続いて、気質の特徴と恥または罪悪感に関わる行動との関連について検討した。結果、有意な関連として、興味・固執性が低い子どもほど身体的自己慰撫が素早く観察されることが明らかになった。しかし、特に恥や罪悪感に関連する行動との関連は認められなかった。

結 論

本研究では、まず、恥と罪悪感の経験しやすさはおおよそ独立している可能性が示唆された。さらに、各行動の個人差に影響を与える要因を検討したが、しつけとの関連が多く見られた。軽い体罰や愛情撤去の脅しといった方略は2歳台という早期段階で恥の経験に影響している可能性が示唆された。

しかし、恥や罪悪感が個人の特性を表すものなのかを論じるためには、今後、恥や罪悪感を生起させる実験状況として実験者の人形を子ども自身が壊すという状況が妥当であったのか、また、恥や罪悪感に関わる行動の個人差が恥や罪悪感を引き起こすような種々の状況間でおおよそ一致するのかを検討することが必要である。また、本研究では、同一時点での調査であったため、実際にどのような因果関係があるのかは明確にならなかった。より早期段階で正確に測られた気質が恥や罪悪感の個人差にどのように影響するのかを検討すること、社会化として道徳的なしつけだけでなく、より早期段階での養育者や身近な保育者の関わり方や特性を詳細に検討することが重要であると考えられる。さらに、気質の特徴と社会化経験がどのように絡み合っているのかを詳細に検討することによって、恥や罪悪感の個人差の発達メカニズムをより明確にしていくことができるであろう。

引用文献

- Asendorpf, J.B., & Nunner-Winkler, E. 1992 Children's moral motive strength and temperamental inhibition reduce their egoistic behavior in real moral conflicts. *Child Development*, **63**, 1223-1235.
- Barrett, K.C. 1995 A functionalist approach to shame and guilt. In J.P. Tangney & K. W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. Pp.25-63.
- Barrett, K.C., Zahn-Waxler, C., & Cole, P.M. 1993 Avoiders versus amenders: Implications for the investigation of guilt and shame during toddlerhood? *Cognition and Emotion*, **7**, 481-505.
- Benedict, R. 1946 *The chrysanthemum and the sword*. Boston: Houghton Mifflin.
- DiBiase, R., & Lewis, M. 1993 The relation between temperament and embarrassment. *Cognition and Emotion*, **11**, 259-271.
- Dienstbier, R.A. 1984 The role of emotion in moral socialization. In C. Izard, J. Kagan, & R. Zajonc (Eds.), *Emotions, cognition, and behavior*. New York: Cambridge University Press. Pp.484-513
- Dienstbier, R.A., Hillman, D., Lehnhoff, J., Hillman, J., & Valkenaar, M.C. 1975 An emotional attribution approach to moral behavior: Interfacing cognitive and avoidance theories of moral development. *Psychological Review*, **82**, 299-315.
- Ferguson, T.J. & Stegge, H. 1995 Emotional states and traits in children: The case of guilt and shame. In J.P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious*

- emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. Pp. 343-367.
- Ferguson, T.J., Stegge, H. & Damhuis, J 1990 Guilt and shame experiences in elementary school-age children. In R.J. Takens (ed.), *European Perspectives in Psychology*, Vol.1. New York: Wiley, pp.195-218.
- Gehm, T.L. & Scherer, K.R. 1988 Relating situation evaluation to emotion differentiation: nonmetric analysis of cross-cultural questionnaire data. In K. R. Scherer (ed.), *Facets of Emotion: Recent Research*. Hillsdale, NJ: Erlbaum, pp.61-77.
- Geppert, U. 1986 *A coding system for analyzing behavioral expressions of self-evaluative emotions*. Munich, Germany: Max Planck Institute for Psychological Research.
- Goldsmith, H.H. 1992 *The toddler behavior assessment questionnaire. A preliminary manual*.
- Hoffman, M.L. 1970 Conscience, personality, and socialization techniques. *Human Development*, **13**, 90-126.
- Hoffman, M.L. 1982 Developmental of prosocial motivation: Empathy and guilt. In N. Eisenberg (Ed.), *Development of prosocial behavior*. New York: Academic Press. Pp.281-313.
- Hoffman, M.L. 1983 Empathy, guilt, and social cognition. In W. F. Overton (Ed.), *The relationship between social and cognitive development*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. Pp.1-51.
- Keltner, D. & Buswell, B.N. 1996 Evidence for the distinctness of embarrassment, shame, and guilt: a study of recalled antecedents and facial expressions of emotion. *Cognition and Emotion*, **10**, 155-171.
- Kochanska, G. 1991 Socialization and temperament in the development of guilt and conscience. *Child Development*, **62**, 1379-1392.
- Kochanska, G. 1993 Toward a synthesis of parental socialization and child temperament in early development of conscience. *Child Development*, **64**, 325-347.
- Lewis, H. B. 1971 *Shame and guilt in Neurosis*. New York: Oxford Universities Press.
- Lewis, M. 1991 Self-conscious emotions and the development of the self. In T. Shapiro & R. Emde (Eds.), *New perspectives on affect and emotion in psychoanalysis. Journal of the American Psychoanalytic Association (Suppl.)*, **39**, 45-73.
- Lewis, M. 1992 *Shame; The Exposed Self*. New York: Free Press.
- Lewis, M. 1993 Self-conscious emotions: Embarrassment, pride, shame, guilt. In M. Lewis & J.M.Haviland (Eds.), *Handbook of emotions* (pp.119-142). New York: Guilford Press.
- Lewis, M. 1994 Emotional development in the preschool child. In H. Nuba, M. Searson & D.L. Sheiman (Eds.), *Resources for Early Childhood: A Handbook*. New York: Garland Press.
- Lewis, M., Alessandri, S., & Sullivan, M. 1992 Differences in shame and pride as a function of children's gender and task difficulty. *Child Development*, **63**, 630-638.
- Lewis, M., Stanger, C., Sullivan, M. W., & Barone, P. 1991 Changes in embarrassment as a function of age, sex and situation. *British Journal of Developmental Psychology*, **9**, 630-638.
- Lewis, M., Sullivan, M., Stanger, C., & Weiss, M. 1989 Self development and self-conscious emotions. *Child Development*, **60**, 146-156.
- Lindsay-Harts, J. 1984 Contrasting experiences of shame and guilt. *American Behavioral Scientists*, **27**, 689-704.
- Magai, C., Distel, N., & Liker, R. 1995 Emotion socialization, attachment, and patterns of adult emotional traits. *Cognition and Emotion*, **9**, 461-481.
- Miyake, K., & Yamazaki, K. 1995 Self-conscious emotion, child-rearing, and child psychopathology in Japanese culture. In J.P. Tangney & K.W. Fischer (eds), *Self-conscious Emotions: Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride*. New York: Guilford Press. Pp.488-504.
- Potter-Efron, R. T. 1989 *Shame, Guilt, and Alcoholism: Treatment Issues in Clinical Practice*. New York: Haworth.
- Rollins, B.C., & Thomas, D.L. 1979 Parental support, power and control techniques in the socialization of children. In W.R. Burr, R. Hill, F.I. Nye, & I.L. Reiss (Eds.), *Contemporary theories about the family: Vol.1. Research based theories*. New York: Free Press.
- Stipek, D.J., Recchia, S., & McClintic, S. 1992 Self-evaluation in young children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **57** (1, Serial No.226).
- Tangney, J.P. 1990 Assessing individual differences in proneness to shame and guilt: development of the self-conscious affect and attribution inventory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 102-111.
- Tangney, J.P. 1992 Situational determinants of shame and guilt in young adulthood. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 199-206.
- Tangney, J.P., Miller, R.S., Flicker, L. & Barlow, D.H. 1996 Are shame, guilt and embarrassment distinct emotions? *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 1256-

1269.

- Tangney, J.P., Wagner, P.E., & Gramzow, R. 1992 Prone-ness to shame, proneness to guilt, and Psychopathology. *Journal of Abnormal Psychology*, **103**, 469-478.
- Young, S.K., Fox, N.A., & Zahn-Waxler, C. 1999 The rela-tions between temperament and empathy in 2-year-olds: *Developmental Psychology*, **35**, 1189-1197.
- Zahn-Waxler, C., Cole, P., & Barrett, K. 1991 Guilt and empathy: Sex differences and implications for the devel-opment of depression. In K. Dodge & J. Garber (Eds.), *Emotion regulation and dysregulation*. New York: Cam-bridge University Press. Pp.243-272.
- Zahn-Waxler, C., & Kochanska, G. 1990 The origins of guilt. In R. A. Thompson (ed.), *Nebraska Symposium on Motivation: Vol.36. Socioemotional development*. Lincoln: University of Nebraska Press. Pp.183-258.
- Zahn-Waxler, C., & Kochanska, G., Krupnick, J., & McKnew, D. 1990 Patterns of guilt in children of de-pressed and well mothers. *Developmental Psychology*, **26**, 51-59.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., & King, R. 1979 Child rearing and children's prosocial initiations toward victims of distress. *Child Development*, **50**, 319-330.
- Zahn-Waxler, C., Radke-Yarrow, M., Wagner, E., & Champman, M. 1992 Development of concern for oth-ers. *Developmental Psychology*, **28**, 126-136.
- Zahn-Waxler, C., & Robinson, J. 1995 Empathy and guilt: Early origins. In J.P. Tangney & K.W. Fischer (Eds.), *Self-conscious emotions: Shame, guilt, embarrassment, and pride*. New York: Guilford Press. Pp.343-367.